バルトン家と福沢諭吉の不思議な関係

稲場日出子

ご紹介いただきました、稲場でございます。本日は、バルトン家と福沢諭吉の不思議な御縁について少しお話させて頂きます。

私の大切な友人の都立墨東病院脳神経外科医長の藤原一枝先生のパソコンネットのお仲間に、馬場紘二んという方がおられまして、この方は、五十歳位の方で慶應大学出身の会社経営者なのですが、文章を書くことがお好きでして、福沢諭吉協会の有力なメンバーでもございます。馬場さんは毎月五の付く日、五日、十五、二十五日の月三回「等々力短信」という、エッセイをお書きになって、この文章をパソコンネットと郵送で送っていらっしゃるのですが、たくさんたまりますとまとめて、エッセイ集として「五の日の手紙」と題して出版なさっています。この楽しい「五の日の手紙」の第三集を藤原先生から送って頂いたのですが、その本の真中当たりのページに「西洋事情を読む」という題の随筆がありました。

この「西洋事情」と申しますのは、福沢諭吉の著書で日本の近代化に大きな力を与えた当時（明治初期）のベストセラーなのですが、この「西洋事情」という本は、お読みになった方も多いかと存じますが合計一〇冊からなっているもので、初編三冊が慶応二年（一八六六年）に、次に「西洋事情外編」として慶応四年（一八六八年）に三冊が出版されました。この年は、九月に元号が「明治」に改まり、明治元年になりました。さらに、明治三年に四冊を出版致しました。

ここで話題となりますのは、明治元年に出版されました「西洋事情外編」の三冊でございます。この、「西洋事情外編」と申しますのは、英国の政治経済学の本で、「チェンバーズの政治経済学」の翻訳が主体になっているということがハーバード大学のアルバート・M・クレイグ教授の研究によってわかっております。馬場さんのエッセイでは、この難解な英語の本を福沢諭吉が実に判り易い名文で翻訳し、また当時の人々も喜んで読み大ベストセラーであったこと、福沢諭吉の英語力は素晴らしいものであったことなどを書いておられました。そういう内容だったのですが、私としましては、その文章に書かれている一人の方のお名前に飛び上がらんばかりにびっくりいたしまして、すぐに主人に話すとともに藤原先生にもお話ししたのですが、その「西洋事情外編」三冊の元になりました名著「チェンバーズの政治経済学」という本は、それまでチェンバーズという人の著書であると思われていたのですが、ハーバード大学のクレイグ教授（歴史学）の研究により、チェンバーズというのは、この本の著者ではなく出版社、ウイリアム・チェンバーズ、ロバート・チェンバーズ兄弟の名前である事がわかったのです。そうしまして、このエッセイの中にごく最近、この「チェンバーズの政治・経済学」という本の著者が、ジョン・ヒル・バートンと言うスコットランド人である事がわかったと書かれてあったのでした。このジョン・ヒル・バートンの名前は、稲場紀久雄著「都市の医師」の中に度々出てまいりますウイリアム・キニモント・バルトン先生のお父さんその人の名前であったのでございます。福沢諭吉の書いた「西洋事情外編」三冊は、バルトン先生のお父さん、ジョン・ヒル・バートンの名著「ポリティカル・エコノミー」という本の翻訳であったわけです。後日、福沢諭吉協会のこのことに関する資料を送付していただいたのですが、この資料によりますと、ハーバード大学のクレイグ教授には「ジョンヒル・バールトンと福沢諭吉、西洋事情外編は誰が書いたか」と言う長い題名の論文もあるそうです。この一連のことは、藤原先生からエッセイを書かれた馬場さんにも伝わりまして、大変驚かれ喜んでいただきました。ちょう

ど「等々力短信」七〇〇号記念の会を開催されるところで、さっそく七〇一号に「バートンとバルトン」と言う題名で、このことについて書いていただきました。

さて、さきほど主人が「京都とバルトン先生」と題しまして、お話をさせていただきましたが、バルトン先生の娘さんのたまさんの長女のたへ子さんは、京都で育ち、同志社を卒業され音楽家でした。そして、鳥海一郎さんという新聞記者の方と結婚されました。たへ子さんは残念なことに先年亡くなられたのですが、その長女の鳥海幸子さんは現在、京都市の上賀茂にお住まいで、私どもの住んでいる下鴨から、歩いて二十分ほどの距離なのです。「福沢諭吉とバートン」のこを鳥海幸子さんにもお伝えしたのですが、『福沢諭吉がねえ。」ととても驚いておられました。「バートンとバルトンは、親子で日本の近代化に貢献したのであった」と、等々力短信七〇一号で馬場さんは結んで下さいました。今年は戦後五十年と言うことで、私はこの間鳥海幸子さんから伺ったお話を少しさせていただきたいのですが、日本にたくさんの貢献をして下さった外国人の方たちのお孫さんとか曾孫に当たられる方々が、あの戦時中に大変ひどい迫害に合い或いは疎外され、つらい思いをされました。鳥海幸子さんもそのお一人で、幸子さんは、『今、皆さんが曾祖父の事をいろいろ調べていただき大事に思っていただいているのはとてもうれしいのですが、母も私も戦時中に受けた心の傷が余りにも深いので、スコットランドの親戚の事も、曾祖父の業績の事も何も調べる気にはならなかったのです。』とおっしゃいました。幸子さんは、お父さんの鳥海一郎さんに良く似ていられて、日本的な端正な御顔立ちをなさっていますが、幸子さんのお母さんのたへ子さんは、たまさんによく似ておられて西洋風のモダンなお顔立ちで戦時中、鳥海幸子さんが丁度小学校低学年のころ、保護者会の時などにたへ子さんが来られると、ヒソヒソと時には大声で、「異国の人が来はった」、「スパイやスパイや」といじめられたそうです。幸子さんも「スパイの子」扱い、新聞記者でいらしゃいましたお父さんも英国系の人と結婚されているということで、ずっと特高にマー

クされていたそうです。今思いますと信じられないことですが、そのようなこともあったということです。戦後、日本人の悪い癖で、当事の事を忘れてしまうのですが、国外・国内で迫害を受けられた方々は、決して当事の事を忘れてはいらしゃいません。戦争が終わってからも、幸子さんは同級生に「おい外人、ガムくれ、チョコレートくれ、家にチョコレートあるやろう」等と言われたそうです。「バルトン忌」に集う私たちは、バルトン先生の業績等の他に、このようなことも忘れてはならないと思います。

最後に、またこれも御縁なのですが、鳥海幸子さんのお父さん鳥海一郎さん（「都新聞」の記者から「朝日新聞」大阪本社の学芸部の記者をなさいました。）のお父さんに当たられる方が、滝本誠一というお名前で、法律と経済学の学者ですした。鳥海一郎さんのお母さんの方のご実家が代々鳥海山の鳥海神社の神官であるという事情により父と子で姓が違いますが、慶応大学の経済学の教授をなさっていましたので、おそらく福沢諭吉の「西洋事情外編」を講義に使われていたのではないかと思います。滝本先生の著書を鳥海さんからお借りしてきたのですが、「欧州経済史」という本は「西洋事情」と同様にヨーロッパの農業等のいろいろな経済問題や政治問題について書かれたものです。現在のボスニア・ヘルセゴビナ・スロベニア問題などについても書いてあります。滝本先生は、将来子息の一郎さんの奥さまになられる方の曾祖父の著書を福沢諭吉が翻訳して紹介したものだとは想像もせず「西洋事情」を手にされたことでしょう。以上、「福沢諭吉」と「バルトン」家の不思議な関係についてのお話を終わります。

等々力短信

等々力短信　第７０１号　平成７年（１９９５）３月２５日

バートンとバルトン

「芳賀徹氏と『西洋事情』を読む会」に参加させてもらった話の中で（平成５年１月１５日「等々力短信」６２４号）つぎのようなことを書いた。　福沢諭吉の『西洋事情』外編は「チェンバーズの『政治経済学』」の翻訳が主体なのだが、この「チェンバーズ」は著者ではなく、この教育叢書を出していた兄弟の出版業者で、近年ハーバード大学のクレイグ教授によって、著者はジョン・ヒル・バートン（1809-1881）というスコットランド人であることが判明した。　墨東病院の藤原一枝先生のお友達の、稲場日出子さんが『五の日の手紙３』のこの部分を読まれたことから、思わぬ展開になった。

稲場日出子さんの夫君は大阪経済大学教授の稲場紀久雄さんといい、建設省の土木研究所の下水道部長などを歴任した方で『都市の医師』（水道産業新聞社）という著書がある。　日清戦争直後の台湾に上下水道をつくった土木技師浜野弥四郎の伝記だ。　浜野弥四郎は東京帝国大学工科大学で、日本の衛生工学の師と呼ばれるウィリアム・キニンモント・バルトン（1856-99）に学び、恩師とともに台湾に渡って衛生工学を実践した日本の衛生工学のパイオニアだった。　そのＷ・Ｋ・バルトンは明治２０（１８８７）年に英国から明治政府の招請に応じて来日したお雇い外国人で、台湾に行く明治２９年まで、帝大教授として多くの衛生工学の技術者を育てる一方、内務省の衛生局顧問技師を兼任、東京、大阪を始め主要都市の水道計画を指導した。　その間、浅草十二階（凌霄閣）を設計したり、日本写真会の創設に尽力するなど、幅広く活躍している。　日本人満津と結婚、愛嬢多満を遺した。　浜野弥四郎やバルトンの事績を調査していた稲場さんが、多満の孫、バルトンの曾孫にあたる鳥海幸子さん（京都にお住まい）に出合っていたことが、今回の貴重な発見をもたらした。　偶然一役買った私も大変嬉しい。

明治日本の水道の先生Ｗ・Ｋ・バルトンは、近代日本のシナリオとなった福沢諭吉の『西洋事情』に大きな影響を与えた、ジョン・ヒル・バートンの長男だったのだ。　稲場紀久雄さんの『都市の医師』１８１頁以下に、Ｗ・Ｋ・バルトンの履歴と来日の事情が書かれている。　私は、その父親についての記述が『福沢諭吉年鑑１１』（1984年・福沢諭吉協会刊）所収のアルバート・Ｍ・クレイグ教授の論文「ジョン・ヒル・バートンと福沢諭吉」のジョン・ヒル・バートンについての記述と一致することを確認した。バートン（バルトン）は、親子で日本の近代化に貢献したのであった。（馬場紘二）

『西洋事情』を読む

昨年の十一月から十二月にかけて、二十数年ぶりに三田の山に帰り、演説館に銀杏の落葉がはらはらと降りかかるのが見える教室で、至福の時間を過ごした。福沢諭吉協会主催の「芳賀徹氏と『西洋事情』を読む会」に参加させてもらったからだ。土曜日の午後五回にわたる講義だったが、終った後、四十人ほどの参加者の多くは異口同音に「こんなのを一年くらい続けたい」という感想をもらした。「自発的」な学びと、学生時代のそれとの収穫の差を、いやでも比較することになった。以前、社会人が一時的に学校へ帰る制度がアメリカなみに、もっと普及してもいいと、書いたことがあるが、あれも芳賀徹さんの「江戸像の系譜」という岩波市民セミナーに通った時だった。

福沢諭吉の『西洋事情』が当時の大ベストセラーで、近代日本のシナリオになったことは、よく知られているけれど、今日、『西洋事情』を読んだことのある人は、ほとんどいないのではないか。かくいう私も、しばしば福沢諭吉を引合に出したり、知ったかぶりをしていながら、恥かしいことに『西洋事情』を読んでいなかった。『西洋事情』は、初編の三冊が慶應二年(一八六六)刊、外編の三冊が慶應四年(一八六八、九月に明治に改元し

「五の日の手紙3」より

た年)刊、さらに二編四冊が明治三年刊の、合計十冊から成っている。初編と外編の間に、福沢二度目のアメリカ行きが、はさまる。初編を出してすぐ、軍艦受取の随員でアメリカへ行った無名の福沢は、帰国したら、『西洋事情』によって、日本中の字を読める人なら、知らない人のいない有名人になっていたのだ。

今回、第一の収穫は、福沢の英語の実力を知ったことだ。外編は「チェンバーズの『政治経済学』」の翻訳が、主体になっている。「チェンバーズ」は、著者ではなく、この教育叢書を出していた兄弟の出版業者で、近年ハーバード大学のクレイグ教授によって、著者はジョン・ヒル・バートンというスコットランド人であることが判明した。「読む会」で、芳賀さんは"POLITICAL ECONOMY"の原典と福沢の翻訳を、突き合わせながら読んでくれた。大学の入学試験にでも出そうな十九世紀のもってまわった難解な英語を、英学転向八年目の福沢は、完全に自分のものにしているのだ。日本語にない語彙も多かったこの時期、原文よりもわかり易く、しかも福沢流の平明な名文に移し換えた才能のきらめき、いい時期に、いい人がいたことは、日本の幸福というほかない。

〔第六二四号　平成五・一・一五〕